

研究ノート

続テアイテトス

ホメロス論の補注から、プラトン論の序へ

上 田 高 弘

1. 考察——ミューズがもう降りてこないのなら

ホメロスのではないが「物語」的と呼ぶしかない事象へ

副題で「^{アディショナル・ノート}補^{ノート}注」たることを断っている、そんな文にさらに注を付すのは野暮というものである。ゆえに本稿は、本文だけで完結させる。

昨年度末刊行の当紀要（第692号，2025年3月）にささやかなホメロス論「セイレンの歌はどんなだったか」を寄せたとき以来の件である。そこまでは著者に権利がある再校を終えてゲラを編集部に戻した直後、修正をさらに入れたくなかったものの、編集業務に支障をきたすという以上の理由でその衝動を抑えた。逡巡は、文献表を除いた最終ページの最下部、文末脚注29個のうちの最後のものに起因していた。そこまでずっと論じてきていた「オデュッセイア」について最後の最後にやっと——もちろん選ばれた方法としてだが——、「西洋古典学でなく美学の今道友信の訳で紹介する」と断って実行したアリストテレスによる梗概（+ほんの短い自注）の引用〔第1段落〕、そしてそれを受けた私自身のコメント〔第2段落〕を、この本文の冒頭を飾るものへと、昇格させる。（出典情報等は再録せず、かわりに第2段落の、いわば「躓きの石」にあたる部分に番号+下線を付す。）

〔…〕「或る一人の男が、長の年月、故郷を離れていたが、海神ポセイドーンが見張りをゆるめないで帰れず、ひとり流浪していた。その上、自分の家では、その妻への求婚者たちによって財産は浪費され、息子が謀殺されようとしていた。しかし、この男は苦難の嵐の末に帰り着き、幾人かの者と誰であるかをあかし認め合った上、自ら攻撃を企て、自分は助かり、敵どもを滅ぼした。」／これが『オデュッセイア』に固有のものであり、あとはすべて挿話なのである」〔出典省略〕。

①私は元来、アリストテレス的に生きたいと願う者で、また同書中で種々の示唆を与えられながらも、さすがにこの梗概は簡約に過ぎる^②と思い、以来、むしろプラトン推しだ。^③詩（物語）を痛罵しながら^④ウルトラ物語的（？）な対話篇を多数ものした彼がどうしたって本当はホメロスが好きなのは、明白である。

順に検討してみたいが、下線部①についてはまず、「お前さんの生きる信条には関心はない」と言っても済ませてもらって良い。同②も、「プラトン推し」となったのはこのアリストテレスの「梗概」のシンプルさゆえの心変わりではないし、含意されるかもしれない「アリストテレス嫌い」といったこともなくその分析の豊かさ全体からはなお示唆を与えられ続けているので、二重に偽証

である。ということで第2段落の第1文は、ほとんど抹消相当。

議論（言い訳？）の余地があるのは同③からである。数通の書簡を除けば、いまに残るものはすべて対話篇という文学形式を採っている、そんなプラトンの書き物にあつては、哲学的に考量に値する発言をなす主導者は彼自身ではなく——書簡以外のいっさいの「作品」中に彼自身は有意に登場すらしない——、基本的に、彼の師ソクラテスである。それゆえ件の部分も、「師ソクラテスに詩（物語）を痛罵させながら」と、そうでなければ「師ソクラテスの言葉を借りて詩（物語）を痛罵しながら」の、いずれかへと修正する必要が生じる。

だが、その文面止まりだと——そしてすでにページ数まで確定したあとの注の修正でできるのはその程度のことだったろう——、書き手（この場合は「私」）は次の二つの立場の間のどこにプラトン哲学を定位するかの、いわゆる「ソクラテス／プラトン問題」への意思表示を先送りしていることになる。

(a) 作中の「ソクラテス」の発言や思想はすべてソクラテス自身のものである。

(b) 作中の「ソクラテス」の発言や思想はすべてプラトンのものである。

「すべて」がミソである。ありえないだろう、そこまでのことは。そして、だからこそその「間」が問題なのだが、しかしそもそも同じ端っこ同士でも、(a)にたいするのと、(b)にたいするのとでは、アカデミシャンらの距離感はおおいに異なっている。すなわち、プラトン学をほんの少しでもかじるとかならずお目にかかる「バーネット／テイラー説」なるものはほとんど(a)の別名であり、現在でも一定の敬意が払われてはいるとはいえ過去のものとしてされている一方で、ソクラテスのものであろうと、影響が咀嚼されてプラトン自身のものとなったものであろうと、もとよりプラトン自身のものであろうと、プラトン学者の大半は——たとえば今日でも邦訳が入手しやすい唯一の『国家』の版の訳者である藤沢令夫を筆頭格に——、自身が与しない説を師に語らせはするまいとの臆断も働かせたうえで、おおむね、かつ自然に、(b)側に傾いていると見受けられる。

そう、「おおむね」とするのは、細部についてソクラテスとプラトンを「腑分け」する慎重な議論ももちろんあるからだが——それと対照的なのは「プラトン文学」を読むのにプラトン自身の考えをどうこうと思索する必要などそもそもないとする林達夫（『タイスの饗宴』）による有名なプラトン学批判である——、いずれにせよそういう事情ならあの再校直後、修正はもとより逡巡さえ不要だったということになる。そして、にもかかわらず本稿が書き起こされているのは、残る下線部④——姑息にも「ウルトラ物語的(?)」とクエスチョンマークを付して逃走ルートを確保した気になっていた——にしっかり落とし前を付けておきたい、と私自身が念じるからである。

端的にまず、アカデミックな媒体にふさわしい表現かどうかだが、事後とはなるものの検索したところ、原語としたい“ultra-narrative”を術語として使用する英語論文が何篇も引っかかってくるので、掲載撤回を申し出なければならないような瑕疵ではない、との開き直りは可能である。それどころか、プラトンが採用する対話篇の、他に適当な語句が見当たらないので「超」という接頭語を付してやりすごした、少なくともホメロス的ではないがそれでも「物語」的と呼ぶしかない事象にかかわってその語（概念）の有効性を敷衍したいと思う者であり、そのために、標題にその文字列が読まれることになっている『テアイテトス』を呼び出すことになった。

カタカナ6文字で表記されている。プラトンのこの種の作品名のことだからソクラテスの対話の相手の名前（固有名詞）であることが容易に推測されよう。しかし本稿の標題ではそれに「続」という漢字が冠されている。その所作から、水村美苗がまだポストモダンの季節（1988 - 90年）にデビュー作で試みた文学的趣向——夏目漱石の未完の『明暗』を書き継いで『続明暗』とした——が最終的に^{シミュレート}模倣されるのだらうとの予断を与えるとしたら、私は正直者だからそのアイディア借用のことは否定しないでおくが、そうした^{けれん}外連も含めて、急に——つまり先のホメロス論を書き終えてから——思いついたのではないことは示しておきたく、そこで以前、このたびの再説など予想だにせずに『テアイテトス』よりはるかによく知られたプラトン作品に言及していたときの旧稿をまた呼び出し、若干の自己批判も交えながら紹介しておくことにした。

間接話法の超絶技巧——『饗宴』の場合

やはり当紀要の4年前の号（第668号、2021年3月）に寄稿した別の研究ノート——正統二篇による吉田健一論の正編〔あるいは序〕にあたる「戯文ニ真理アリ」——で、手法としての対話篇一般に言及していた場面での、これは本文の記載である。

いかにも乱暴な整理になろうがそれ〔＝対話篇〕はまさにプラトン以来、何がしかの蘊蓄を語る間接話法のスタイルだった。そうして哲学畑の人はふつう、その構造を前提したうえで原著者がそれぞれの語り部——プラトンにとってのソクラテスであれヒューム（『自然宗教に関する対話』）にとってのクレアンテスそれともフィロであれ——に託した内容を汲み取るのを主要課題としてきた（と私は推測する）わけだが、稀代の多重人格者キルケゴールを読む者は、プラトンも真っ青の間接話法の超絶技巧のようなものに惹きつけられ、あるいは逆にそれゆえに突き放されてきた。

当時も注は付した「クレアンテスそれともフィロ」の件から。「自然宗教に関する…」の限定が付いた標題の「対話」の、二人の主要登場人物——前者が理神論者、後者は懷疑論者——のいずれに作者デイヴィッド・ヒュームの立場は近いのか、という長らく研究者間で見解の一致に至っていない問題があるらしいと見聞きはしてきていて、つまりソクラテス（プラトン）の場合のような迷いが生じる以前のものなので接続詞「それとも」を挟んだのだったが、そんな擬似アカデミックな関心を蹴散らすのが、終盤に読まれる「多重人格者キルケゴール」の実践である。対話篇という文学形式のパロディーの様相さえを呈している『酒中ニ真理アリ in vino veritas』というラテン語名の作品をそこでは具体的に指していたが、考察としてはむしろ、哲学者の手になるこの異形のフィクションの影響がさらに時間と場所を隔てて吉田健一の中編小説『金沢』——最初の5話それぞれでいかにも特徴的な主導者と聞き手＝主人公（内山なる鉄屑問屋の経営者）が一对一の対話を交わしたあとに最後（第6話）は主要登場人物全員（主人公+そこまでの5話の対話者+^{バツグン}妖精のような出入りの骨董屋）が一堂に会してこの世のものとも思えない大宴会となる——にまで及んでいる、と私は物証（^{エビデンス}『酒中ニ真理アリ』の仏訳からの重訳であることさえほとんど知られていない『追憶の哲理』〔共訳者は堀田善衛〕）込みでぶち上げたのだった。

否、たんに「酒宴」を舞台とした多人数による対話であることの共通性にだけそのときはもっぱ

ら目を奪われ、いまこの「補注」でやっと着目しようとしているものこそは、だからこの議論の文脈で吉田から数えると二世代前のものとなるプラトン作品——その名も『饗宴』——の、作品冒頭でいきなり開示される対話篇としての構造の異様である。

悲劇作者アガトンがその道のコンテストでの勝利をデビュー作で獲得したのを本人宅で祝賀するのに、「愛」を主題とする演説大会をもってした。その、現在——それが語り始められつつある時点——よりはるか遠い昔の出来事が伝聞として語られる、という設定自体は、むしろいたって自然。アポロドーロス（ソクラテスの崇拝者）がアリストデモス（ソクラテスの友人で件の饗宴に臨場していた）から伝え聞いた話を、名前が明記されない（それゆえもあってわれわれ読者と比較的容易に同一化する）友人が又聞きする、ということなのだが、話はそれで済まない。同じアリストデモスに発する一種の伝言ゲームで同じ饗宴にかんする情報を得ていた、そんな「ある人」から先に又聞き（あるいは「又々聞き」？）していたのだけれどどうにもその「ある人」の話が曖昧だったことに業を煮やしたグラウコン（弟の対話篇の数々に頻出する、つまりプラトンの兄）がアポロドーロスに聞き正す、という出来事が、間をそれほど空けずに先行していたらしく、そうして再話要望に応える努力を一度払ったあとだったのでアポロドーロスも匿名の友人（≡われら読者）の要望に応える「準備」ができていた、というわけである。

そう、ここまでの錯綜ぶり——それでも私の上の要約はテキスト本文の叙述はもとよりプラトン学者諸氏の説明と較べてもまだしも分かりやすくなっているはずだ——は同じ作者の作品でも『パルメニデス』くらいにしか見いだせまいが、そんなものを目にすると、それが何度目であってのも思うのである——そんな経緯を最初に聞かされて理解が促進される、なんていうことはあるまい、と。そして、こういう一種の難読化（obfuscation）こそが、先に引用した私の旧文中に読まれた「間接話法の超絶技巧」の句が指示する事態にほかならないわけで、だから、「プラトンも真っ青の」の句が冠されているのは拙論中では筋が通っていたのだとしても文言そのものをもはや「キルケゴールも真っ青の」へと変更してプラトンの名にこそ冠し、この対話篇なる文学形式の実質的な創始者が早くもマニエリストであった事態が出来している、と考量するのが適切と思われる。

実際、私はまったく信じていないがプラトン学者らによれば徐々に深化していくらしい、愛にかんする6本（+ a）の演説——数人（a人）の演説は記憶するに値しないものだったと打遣られているのも興味深い——は、『国家』最終第10章のエル（臨死体験からの生還者）からの伝聞さながら、巫女ディオティマのオカルト譚をソクラテスが口伝えのように再話して終わるのだから、それもまた別の意味で奇っ怪きわまっているのだが、この本編の異様へとアクセスするためには冒頭でこの多声フーガさながらの序奏部分を通過せねばならず、ところが納富信留はこの難所について、Eテレ（NHK）放送の『100分 de 名著』がこのプラトン『饗宴』をフィーチャーした月（2013年7月）の教材テキストの第一章で、「プラトンがなぜこんな錯綜したスタイルをとったのか、私たちは推測するしかありませんが」と前置きしたうえで、「聞き手——私たち読み手——との対話の距離、つまり、間接性を高めることで、ファンタジーのような雰囲気醸し出すためだったのかもしれない」と書く始末なのである。本邦プラトン学の第一人者の本件にかんする見識がこの程度のものであるはずがないが、一般視聴者／読者向けだからこそいっそう要を得た説明を尽くすべきところで、面倒なので「かもしれない」の逃走線まで確保したうえでそんなお茶の濁し方を選んだのだらうことに、正統なプラトン学からすればやはり一般人に過ぎなかつた私は心底、腹を立てて

いるのである。(納富はこの『100分 de 名著』のプラトンを Kindle ほかの電子書籍のラインナップから削除した理由——上とは別次元のものを私は推量している——もどこかで説明すべきである。)

そう、それなら私の「ウルトラ物語(的?)」のほうはまだしも妥当と思えるほどだが、ひるがえって、この『饗宴』ほどアクロバティックではなく、したがってその超絶ぶりをマニエリスムに準えたのと比すればアルカイックとさえ形容したい仕方で「対話篇とはいかなる文学技法なのか」を原理的に考えさせるのが、次に本題としてとりあげる『テアイテトス』にほかならない。

「日付」から「外見」へ——『テアイテトス』の複数の焦点

今度は最後ではなく最初に、しかしあのアリストテレスの方法で——ということはシンプルすぎると難じたわりにはやはり有効性を認めている！——、『テアイテトス』の梗概を綴ってみる。

訃報が伝わってきてまだ日の浅い、或る才人(数学者)の話題で、街で再会した二人の男が盛り上がった。一人は、亡くなる直前の、救急搬送中のその才人を目撃していたばかりか、彼がまだ年端も行かぬのにその聡明によって対話者ソクラテスをおおいに魅了した過去のエピソードをソクラテス自身から聞いて後日、その記憶を文字として書き起こし、あまつさえ校閲も済ませていた。浄書済みの書物^{パピルス}のある一方の男の家へと二人は場所を移し、従者^{わらべ}の童がそれを朗読するのに耳を傾けた。

オデュッセウスがトロイアからの帰途に経験した、セイレンのエピソードもそれに含まれる艱難辛苦が、ただ「苦難の嵐」としか書かれていない『詩学』の著者の梗概に、見せかけでだが私が憤ったようにして、上の試作品についても、ソクラテスが才人の卵(テアイテトス)と交わす対話の中味に^{かん}する論及は影も形もない、と指弾するプラトン学者はあって良い。だが正直を打ち明ければ、私には、そこで「知識とは何か」をめぐって展開され、最終的に有名な産婆術の比喩に^{たり}つづく対話の中味は、——^{エロス}愛をめぐる『饗宴』での議論がそうであったように——禅問答のように読めてしまうばかりで、だから、「セイレンの歌はどんなだったか」の無謀な問いを私が立てたように、関心ある者がそれぞれの発問と考察において委細を尽くせば良い、という話になる。

いや、対話篇の枠組みにだけ着目した、上の擬アリストテレス的な梗概には、私も自作者ながら不満を抱く者であって、それを克服する作業の前座として、カール・ポパーを呼び出してみる。それが論集『推測と反駁』(1963年)に自身の方法論と実践のエッセンスを込めた科学哲学者の名であるなら——実際にそうなのだが——対話の主題である「知識とは何か」でも縷説に精を出したはずだが、彼はむしろ政治(哲)学者として『開かれた社会とその敵』(初版=1945年)を書いた。第二次世界大戦のさなか、台頭する全体主義の複数の諸源泉を剔出するために書かれた二巻本の名著の、その第一巻をプラトンの哲人王理論の批判に充てたことは、同巻の標題をそのまま自著全体のそれに流用したことだけが惜しまれる『プラトンの呪縛』(初版=1998年)で政治学の佐々木毅が、また真打ちとしてプラトン学から立って『プラトン 理想国の現在』(初版=2012年)であの納富が、それぞれ説得力豊かな批判的紹介をおこなっている。ゆえに私はもう満腹状態。著者が最後まで書き込みをおこなっていたというドイツ語訳(訳者はファイヤアーベント!)の版にもとづいて岩波文庫に新訳(4冊に分冊、2023年)がラインナップされたからといって、いまさら飛びつくポッパリアン

では私はないはずだったが、未来社刊の旧訳（1980年）になかった『テアイテトス』の日付問題（1961年）という付録^{アデンダム}が訳出されていて、その点で新訳版から、次の示唆を得ることになった。つまりポパーは、プラトンが中期以降に書いたとされる同作の細部（175A）に、真に中期以降の作なら書きつけはしなかっただろうソクラテス由来の人道主義的な文面——乱暴に約めれば「奴隷を使役している貴族だって何代も前まで遡ったら奴隷の先祖がいるかもよ」となる——が読まれて、つまり、もっと早い時期に書かれた対話篇がテアイテトス夭折の折、追悼の意味も込めて改訂されたのにその改訂が完璧でなかったからソクラテス的な細部が残存した、と仮説したのである。

先に「例外的に細部について」は「ある」と書いておいた、「ソクラテス／プラトン問題」にかんする「腑分け」が、そういったものこそを得意とするのだろう者たちによる批判の格好の餌食となることも恐れず（もちろんプラトン学者らの説もそれなりに援用しながら）なされているのだが——現代の全体主義の本源をプラトンに帰す上位視点ももちろん批判を免れなかった——、「反駁」可能性への開かれの、そのポパーの言行一致ぶりに勇気づけられた私は、望遠鏡と顕微鏡のいずれを装着するのでもない裸眼で、外枠と主題の間の文字列に「テアイテトスの外見問題」——もちろんポパーの「日付問題（the dating）」をもじったものである——を認めることになる。

「外見」とは「容姿」のことである。つまりソクラテスが醜男^{ぶおとこ}であったとはつとに語られてきているが、それはテアイテトスも共有する属性なのだった。これ以降でその訳文を参照する同書の光文社古典新訳文庫版の訳者・渡辺邦夫は「外枠」という表現をもちいることで、実際に使っていないものの「内枠」の概念を暗示するが、つまりその内枠＝対話の中味の出だしの部分で、「将来すぐれた人間になる見込みのある者」を紹介してほしい、とソクラテスからもちかけられたテオドロスが一も二もなく、まだ十代と思いきテアイテトス引き合わせる、その直前、ソクラテスに発するセリフが、「本人に向かってそれを言う？」と思うほかない以下のもので、この文面そのものがまず、そしてプラトン学者らがあまりこの点に興味を示していないようなのでそのことがまた輪をかけて、私を驚かせる。

「…」かりにその男が美男子だったなら、その者にわたしが色気をもっていると思われないよう用心して、讃えることを極力控えようとしたことでしょう。しかし現実には——このようなことをわたしが言うからといって、どうか機嫌をそこねないでいただきたいのですが——この者は眉目秀麗^{びもく}ではありません。かれはむしろ、めくれた鼻といい、出目といい、あなたに似ているのです。ただし、あなたほどひどく不格好というわけではありません。／それでわたしはかれを、なんのためらいもなく褒めることができるわけです。（143E－144A）

それだけではない。そう述べている間に向こうからやってきた若者たちの一団に、テアイテトスの姿が認められた。「こっちに来てソクラテスの横に座りなさい」とテオドロスが促したのに従った若者に、同じプラトンの初期対話篇『カルミデス』でタイトルロールの美少年にドギマギした同じ者とは思えない口ぶりでソクラテス自身、こう言い寄るのである。

そうだ、そうしなさい、テアイテトス。／これでわたしは自分自身について、自分がどんな顔つきなのか、つくづくと眺めまわすことができるわけだ。テオドロスはわたしに、わたしが

きみと似ていると言ったからね。(144D)

写真術はおろか、鏡もない時代だ。否、後者は比喩の素材以上のものとして古代ギリシアでも早、それなりに有用にもちいられてきてはいて、この『テアイテトス』のなかでも、「鏡のなかで視覚において右を左に入れ替えてしまってこうむる取り違えの状態」という文面が読まれるとおりだ。だが、身だしなみをざっくりと整えるためという以上に正確に——もちろんそこに記されるように左右を反転させて——モノの外観を映しだすその誕生はルネサンス以降を待たねばならないから、自身の顔の造作がどんなかを知るのはナルキッソスばかりではなく皆、静かな水面を覗き込むほかない、そんな時代だった。とすれば、齡七十に達する老人にそんな経験がいっさい無かったとともにわかには信じがたいが、いわば3D（三次元）的に「自分がどんな顔つきなのか、つくづくと眺めまわす」のが初めてであるとするソクラテスの証言にはきっと、真実の欠片以上のものが含まれていた。そして大事なことにその、「自分がどんな顔つきなのか」を知ることの感慨は、ひと目で醜男とわかる初対面の老人から「わたし（は）きみと似ている」という言葉を浴びせられた若者テアイテトスにとっても、程度としては変わらぬものだったと推測するのだが、はたして、幼時からイジメに合っていたりして自身の容姿のことをテアイテトスはそれなりに自覚し、よって免疫(?)がある程度、出来ていたものかどうか…。

いずれにせよ、そうして私はこの可笑しくもあれば悲しげでもある光景を臉に思い浮かべながら、あのアリストテレス的に最短たることを追求した梗概の件に戻るのだが、つまりその2字インデントをかけて表記しておいた段落の末尾の、「童がそれを朗読するのに耳を傾けた」(+句点)に続けて、次の一文を書き足し、もって「外見問題」もが梗概（物語の構造）の一部として取り込まれるべきである、と暴論(?)を書きつけることになる。

[…] そうして聞かれたのは、ともに醜男と評判の老若二人がその顔を突き合わせる滑稽譚の外観とは裏腹に真摯をきわめる、「知識とは何か」をめぐる最上の対話にほかならなかった。

テキスト生成の秘儀、その偽装、それへの加担

グレン・グールドはJ・S・バッハの平均律クラヴィーアの演奏／録音にあたってしばしば、メロディアスなプレリュード（前奏曲）は捨て、構築的なフーガだけを取りだす、そんな偏向を隠さなかった。あるいは、これは証拠映像も残っているが、「ビタミン剤を加える」と言って、モーツァルトのK.333のソナタの冒頭数小節を暗譜で弾いたあとにバッハ風の対位法によって肉声部を厚くした、自身による編曲ヴァージョンを開示してみせた。そんな露悪スレスレの芸当を私はもちあわせないが、文学的に少しく真似てはみて、『テアイテトス』という対話篇の形式への問題関心をもう少し展開させてみたいと思う。

すなわち、『饗宴』であれば結果的に達意の話者として記憶されることになったアポロドーロスが最初にグラウコンから請われてあの日のことを語ろうとしてじゅうぶん上手くは語れなかったもののその苦労もあって二度目は首尾よく進められたのだろう、その推量するほかない再話のプロセスが、『テアイテトス』の「外枠」では文字によって明記されている点である。先の試作品の梗概では約めて「校閲」と表記しておいた件で、「二人の男」のうちの一方のテルプシオンによる、

「その議論は、どんなものだったのだろうか？ 話してもらえだろうか」の問いかけにたいして、もう一方のエウクレイデスが返すのが、以下の応答である。（訳者の渡辺は先達の田中美知太郎〔岩波書店刊のプラトン全集および文庫〕とは異なって「外枠」部分では敬体ではなく常体を採用する。最適な選択か否かの判断は私には無理だが、対話者の関係性に着目した見識である点を多として、新訳を採った。）

それはとうていできないよ。少なくとも、そらで、というわけにはいかない。だが、ぼくはそのとき、家に帰るとすぐ覚え書きを書き留めておいたんだ。そして後ほど、暇を見つけては記憶をたどって書きつづけたし、アテナイに行くことがあればそのたびに、自分で思い出せない部分についてソクラテスに尋ねて、メガラに戻ってはその部分を直したのだ。そうやってかれらの議論は、ほぼ全部、ぼくによって記録されたことになる。（142D-143A）

この部分の見せかけの誠実さは、いったい何なのだろう。誠実とはいってもエウクレイデスの名をクレジットしたい気持ちに駆られさえする書物の、ではなく、われわれ読者がいま読みつつあるテキストの生成の秘儀をエウクレイデスの口を借りて明かすプラトン自身の、であり、われわれはそれをしも虚構とみなす必要があるので「見せかけの」を足すわけだが、それにしても、擬似的に明かされるのは、そのプロセスだけではない。浄書されたパピルス^{パピルス}を「従者の童」に読ませる直前、最初にそれを文字としようと思い立った時点で選ぶことになったと推量される——あるいは校閲の過程で変わったということもありえなくはない——、そんな作文そのものの方針までが、エウクレイデスによって次のように…。

「…」ぼくは、ソクラテスがぼくに語って聞かせてくれた、そのとおりの言葉では書いていない。ソクラテスが「そのように対話した」と言った人々との対話そのものを、書き記したのだ。そして、かれが言ったその対話の相手とは、幾何学者のテオドロスと、テアイテトスだった。そこで、ソクラテスが自分について、たとえば「そしてわたしは主張した」とか「そしてわたしは言った」とか、あるいはその逆に答え手の人について「かれは賛成した」とか「かれは同意しなかった」とか言っていたときには、こうした報告調の言い回しが議論の途中で割って入ってきて、そのために読みにくいという結果にならないように、ぼくのほうでこうした言葉を省いて、ソクラテス自身が相手と対話している、まさにそのままをあらわす文章で書いておいた。（143B-C）

対話篇という文学様式内部での、報告形式から戯曲形式への方法上の遷移が、まさに戯曲形式の文章の内部で語られている。一種の自己言及とみなすことが可能ではあり、しかも現にプラトン自身の対話篇の方法がこの『テアイテトス』以降、むしろ最初期にはおそらく選ぶのでもなく素朴に採ることになっていた戯曲形式へと今度は選んで還って、その後はそれで通されることになる点で意義深さがいっそう増すことになるのだが——ここでさらに「まさにいま書かれつつあるこの作品が…」といった関^{リファレンス}説までであろうものならメタフィクションが出現するところで現代小説みたいな小賢しいことをもちろんプラトンは試みてはいない——、ただしホメロス論の補注に端を発する本稿の関心に留まっていえば、このエウクレイデスの言葉が真に照らしだすのは、それ以前に書かれ

てきたものをも含むプラトンの対話篇が、申し立てによれば (allegedly) ミューズによって吹き込まれた言葉が詩人によって語られる、そんな物語とは決定的に異なる種類のものとなっている事態にはかならない。

いずれにせよ、こうした側面を丸ごと捉えて「ウルトラ物語的」と評することに、何か問題はあろうか。いや、「無い」と言われて安堵するのではなしに、ここまでのところで私が紹介したことくらいプラトン学者諸氏は皆、先刻ご存知のはずの状況下での、要は着眼点、強調点の違いなのだから「問題アリ」としてもらったほうが私の報いは大きいのかもしれない、とは。

ちなみに、専門家による諸対話篇の総合的かつ分析的な比較考察という点では、管見の限りではトーマス・A・スレザーク『プラトンを読むために』（ドイツ語原著、1993年；邦訳、2002年）以上に示唆に富むものはないが、同書中で『テアイテトス』に割かれる紙幅の少なさが、私の関心とのギャップを痛感させ、また落胆させるとともに、それゆえにこうして新たな研究ノートを書くことに向けて勇気づけてくれているところがある。

いや、勇気は、本稿序盤ですでに明かしておいたとおり、私に「続テアイテトス」を綴って偽装にさらに加担(?)させるまでに肥大化することになっているのである。そうしてその戯文の提示をもって本稿は閉じることになるのだが、プラトン対話篇の原則を外れる一点については、以下のとおり、先に明かしておこうと思う。すなわち、――

例の『続明暗』の水村美苗はその自作を、『明暗』の未完の最終回部分を再録してから書き継いだ。新聞紙上での連載の日々の区切りがあって、ここだけを引けば、という範囲が明確に決められる漱石の場合はそれで良いが、プラトンののはそういう意味での区切りはないし、かといってズルズルと長文をとというわけにもいかないなので、私はただ、ソクラテスの発したほんの短い一文だけを抜き出しておいて、そこに漱石（188話）にたいする水村（100話）の場合の、その各一話分にも満たない文字量の戯文（創作）を書き継ぐことにする。さらに言えば、その実際の末尾部分の引用の直後に来るのは、文脈（直前のソクラテスによる呼びかけ）から推測されるテオドロスの発言ではなく、エウクレイデスのである。内側の対話の朗読を童に指示した「外枠」の話者が、最後に物語全体の回収役のようにもう一度、戻ってくるというのは、他のプラトン作品では見られない趣向であろう。余韻は読者が各自で処理せよ、というプラトンの方針（なんだろう）に私もほんとうは倣いたかったが、プラトンの誠実な読者であろうとする意思よりも、より解析的でありたい願望――ヘタをすればただ説明過多と映るリスクがあるが――のほうが、勝ってしまったのである。

この選択の件も含め、試みの成否は本稿の読者諸氏に委ねる次第である。

2. 戯文――続テアイテトス

ソクラテス […] さて、今やわたしは、わたしを訴えたメレトスによる告訴のために、バシレウスの柱廊に出かけなければならない。しかし、明日の朝もう一度ここに、テオドロス、集まることにしましょう。（光文社古典新訳文庫版の渡辺邦夫による訳文の最後の文）

＊

〔しばしの沈黙〕

エウクレイデス … おや、童よ、どうして読むのをやめたのだ。

テルプシオン え？ そうなのか？ いや、メレトスの名が出てきたところで、きみが、その後のいきさつを知る者だけが味わいうるだろう余韻を残そうと、わざとそこで終えたものと思ったのだが。

エウクレイデス いや、まだ数行、残っているのに、ソクラテスに近かったわれらと同程度のこともすでに知るこの者ときたら、その行^{くだり}に達して、感^{かん}極^{きわ}まって言葉が出なくなったようだ。

テルプシオン 信じられん。拙宅にもこの童と同じ年頃の、このところやっと書簡を読むのはかれに任せるようになった徒^{オイクテース}者もあるにはあるが、これほど見事な朗読は無理だし、他の館でもお目にかかったことがない。

エウクレイデス それはそうだろう、頭の良さでは抜きん出た童で、この覚え書きの修正や浄書まで手伝わせているうちにソクラテスについても、あれやこれや教えてやることになったのだ。きみも、そしてこのわたしも臨席した、あの最期の日のこともね。

よし、童よ。長時間ご苦勞だったね。きょうはもう下がって休むがよい。

[童の退出]

テルプシオン だが、そうなると、エウクレイデスよ、きみがかれに読むのをうながす直前、覚え書き成立の経緯を聞かせてくれていたときは何も思わなかったがいまは解^げせない、そんな部分もある。

だって、きみはこうも言わなかっただろうか。つまり、ソクラテスから聞いた記憶をたどって書き留めておこうとしたは良いが、思い出せない部分はどうしてもあって、そうした不確実な部分はアテナイに行くたびソクラテス自身に尋ねさえし、そうしてやっとのことで「ほぼ全部」を記録しえたのだ、と。

あのメレトスの若造のおかげで、この対話の日から四十日後には、ソクラテスは帰らぬひととなるのに、そんなことは可能だったのだろうか。

エウクレイデス わたしの言葉に嘘はないよ。かれが亡くなる前に都合三度、そういう機会を現にもったのだから。

だが、最初は予審が始まった直後で、まだ判決も出ていなかったのでソクラテスを彼の住む館に訪ねることができたのだったが、二度目以降はもう収監の身だった。

そうして接見の限られた時間のなかで、かれはあのときの会話を「全部」、しかも正確に文字として書き留め、心ある者がそれを読んで後世に伝えることを望んだのだ。

テルプシオン 文字は人間を馬鹿にする、と言って憚^{はた}らなかったソクラテスが書物に期待を寄せるとは、にわかには信じられないが、浄書の成ったパピルスがここにあることが、エウクレイデス、きみの言葉の真実を証しているといえよう。

エウクレイデス いざ死が目前に迫ると、テオドロスによって引き合わせられたテアイテトスとの対話が、彼にとっていっそう切実なものとなった、と思われるがよい。

それに、ソクラテスとテアイテトスには、他の者との間にはない特別な共通点があったことだしね。

テルプシオン 容姿の件だね。だからその意味では、対話ではあの冒頭の遠慮のないやりとり以降、その件への言及がいっさい無いのを、わたしは少しだけ不満に思っていたのだよ。

エウクレイデス まさか。それでは「全部」とはならないではないか。

よし。ということで、テルプシオンよ、童に代わって、わたしが対話の最後の数行を読んで進めよう。

＊

テオドロス ああ、やっとわたしの名を呼んで、いまこの場所に同席していることを認識してくれましたね、ソクラテス。実際、最後のほうの白熱したやりとりの最中、あなたの目にはテアイテトスしか映っていなかったようにわたしには感じられました。

ソクラテス そのとおりです。しかも、まるで若い時分のわたし自身と話しているような気持ちにさえ襲われもしました。

テオドロス かれの紹介にあたって、あなたには少々失礼なことも申し上げたことですし…。

ソクラテス そう、たしかにかれは、「眉目秀麗でない」どころではありません。けれど、先の「知識」をめぐる対話では主題化しなかったものの、「美」のアイデアについては、それから遠い者にこそ、より強い欲求を宿らせることを、あなたも理解してくれるだろうと思うのです。

「美」の追求にかかわる部分での最大の利点すなわち「醜」を先天的に備えもつ者が、かりに先の対話によって「知」についても、われらが根本的に「欠ける者」であることを知ったとすれば、もう鬼に金棒かもしれませぬ。

この国の現状を思うならば、メレトスの訴えがわたしの運命にどのような事態をもたらすかは予断を許さないとわたしは踏んでいます、最悪の裁決によって程なくわたしに死が訪れようと、それは杞憂でこのちまだ長くこの世にあらうと、テアイテトスには、二重の意味でわたしの生き方を継いでくれることを期待できそうで、それが、あなたとの間で果たしておかねばならない事のいくつかを明日の朝の再会後へと先送りし、今宵はひとり、対話の余韻に浸る時間をもちたいという気持ちにわたしをいざなってくれているのです。

(本学文学部教授)